

追 憶

同志社大学の学問的水準を堅持した「秘話」

住 谷 悦 治

「真相」と「秘話」とはもちろん相違しているが、「秘話」が「真相」と無関係だというわけではなく、現存している人びとに迷惑をかけたり、真実を明らかにすることによって、すでに現存していない人びとにまで被害を蒙らせるかもしれないという顧慮から真相と関連をもたせる必要がある場合に、興味本位的に周辺の事実を述べようとするときに、よく「秘話」として語られる。けっして無責任の放言ではない。わたくしがこのような表題でいま書きのこしておかねばならぬと考えたのにもそれ相応の理由がある。

この話しは、昨年十二月二十四日グラント先生の納骨式が若王子の「外国宣教師合同記念碑」の前で催されたが、そのさい、わたくしがグラント先生を偲ぶ一挿話を、墓前に集った教授・職員十数名を含めた数十名の男女学生・生徒たちに述べた一つの事実を反復したものである。先日、木村俊夫教授からこんどグラント先生追悼の雑誌を編集されるというお話を伺ったさい、納骨式に参会されていた木村教授と、はからずもその時のわたくしの談話に触れた。わたくしは木村教授に請うてこの「秘話」を書かして欲しいことを申し出たところ、教授は快諾された。その時わたしは、もっと正確に調べて報告的に書けるつもりでいた。ところが事、志と違いそれは思うように果せなかったので、あの納骨式の時の談話に敗戦当時の背景を書き添えて少しでも「真相」に近づけようとしたが、やはりけっきょく「秘話」としてこの一文を公けにすることになった。ご寛恕を請う次第

である。

この「話」の真相について関与した人はグラント先生と嶋田啓一郎教授とわたくしとの三人だけであり、グラント先生すでに永眠され、嶋田教授はあのように口の堅い立派な先生であるからいやしくも人びとに迷惑や誤解を与えるかもしれぬことについては慎重である。その証拠には、このテーマについて、それ以来約三十年近くも、恰も事実を忘れたかのように沈黙を守っていらっしゃるからである。おそらく将来も語られまいと想像する。そうだと仮定すれば、グラント先生の亡き現在少しでも語ることできるのはわたくし一人ということになり、わたくしがもし近い将来にこの世を去るとすれば永遠にこの話の事実は消えてしまうかもしれない。時あってわたくしのこの「秘話」に誤りがあったとすれば嶋田教授に訂正して頂くのほかはない。そのことを切望しつつ述べさせて頂きたい。

ことの起りは、敗戦後、たしか二年目であった。在東京のある一外国人の研究者が、社会福祉・社会保障関係の調査・研究の論文を同志社大学へ博士学位請求論文として提出してきた。そのことについても、その経路・事情についてはわたくしは正確の^{いきまづ}経緯を知らない。当時敗戦後の日本はアメリカ占領軍の支配管轄下にあった。マックアーサーの権威は絶対であったので日本の政治・経済・法律・社会・等々のことは、日本には事実上自主独立性においてことを処理することが困難であったことは周知の事実である。当時日本ジャーナリズムは二つの虚構に充ちた言葉を流行せしめたほどである。それは「占領軍」を「進駐軍」と呼び、「敗戦」を「終戦」と呼んだことである。army of occupation は advancing army として事実を曲げて、これによって民衆を安堵せしめるか、誤魔化すか、敗戦国民の劣弱感にささやかな誇りでも保たせようとしたのかもしれない。しかし平常服の姿のままのマックアーサーとモーニング着用の天皇とが同列に並んで立っている写真などが大きく新聞に掲載されたのだから、もう何んともしようがない敗戦風景となってしまった。

某外人の学位請求論文はそのようなみじめな敗戦という歴史的背景のもとに突如として同志社大学に提出されたのであった。昭和二十二年の某月某日、同志社大学の関係教授と論文執筆の外人研究者、その推薦紹介者たちと合せて内外二十名ほどが関田町の西園寺公清風荘に会合し、同志社側は招待された形で、執筆者の紹介や社会福祉・社会保障・社会施設などの内容をもった論文と統計や統計図表などの文献が提示され参会者の閲覧に供された。もちろんその場で審査されるわけのものでなく一応の儀礼的な紹介とか顔つなぎ的の会合であったと記憶する。わたくしも参会者の一人であったが学位請求論文は、それが敗戦後しかも外人研究者の労作だというので一教授として大変な心の重荷を感じた。あとでグラント先生や嶋田教授などと社会問題関連科目の関係上、わたくしも審査員に選ばれた。

当時京都における占領軍は四条烏丸西南の角の丸紅の大きいビルの上に高くアメリカの国旗を翻し、ビルの入口にはアメリカ衛兵が二人、銃を抱えて、両足を逆V型に開いてキチンと立っていた。通行人はその前を遠慮して避け、通る者はなくその向いの東側通路を往復していた。同志社キャンパスの烏丸・今出川角にあった当時の華族会館も占領軍に「接收」（この文字も掠取という意味を穏かに表現した一例である）され、大きな自動車静かに出入していた。市内の目立った西洋造りの建物や個人の住宅はつぎつぎに接收された。所有者は家族ともども屋敷の片隅の小さいプレハブの中に移り住むことを余儀なくされた。街路には軽快なジープが走り廻り市民を睥目せしめ、京都駅前には多数の浮浪児が集まり、街娼^{ストリートガール}は毎日アメリカ憲兵（MP）にキャッチされて東山平安病院に収容されて検診されていた。

当時同志社の竹中勝男教授は社会施設部面の占領軍のミセス・バトナム中佐の権威のもとに、牧野虎次会長の社会福祉協議会の職員・協力者たちと平安病院に行って自由に街娼調査をすることができた。わたくしも都築秀夫・大塚達雄・榎本貴志雄・小倉襄二・豊田慶治君らと三日に一回、四

百人余りの街娼の実態調査をしこの人たちと共同調査を「街娼——実態とその手記」（二九三頁，昭和二十四年）として公刊しえた。ちなみに当時の京都府・京都市の社会施設の貧弱さと遅滞さは占領軍のセフィールド（「畑田」という名札が府庁の一室の机の上に立ててあった）中佐は見苦しい街路に明るい光と風とを入れよと指令し四条畷から三条まで広い通路をまたたく間につくった。ミセス・パトナム中佐は府市の関係吏員と竹中教授を中心として社会福祉・社会施設関係の専門家・前記社会福祉協議会の人びとともに京都地区・周辺の施設の数々を全部視察し府市の施設の改善と整備のために指令し助言し，指導してその後における発展に寄与すること大であった。セフィールド，ミセス・パトナム両中佐と竹中勝男教授との名コンビが今日の府・市の諸施設の整備の方向を決定した事実上の諸施設産みの親と言い得よう。

こうした京都地区の背景，占領軍の権威と強力な社会福祉施設問題における推進と業績の目醒しさについては今日京都府・市民がけっして忘れてならぬ事実であり，社会福祉問題への心ある市民の驚くべき新しい開眼であったといえよう。

この時，社会福祉・施設に関連した問題をテーマとした論文が同志社大学へ提出されたのであった。論文審査員の学識とか見識のテスト・ケースであり，やがては学界において注目さるべき問題であり，勢い慎重ならざるを得ないことであった。占領下における同志社大学の学者的良心が問われようとしていたのである。グラント先生はこの論文・調査について疑問点があるので慎重に再検討する必要があることを主張され，嶋田教授とともに上京して，お二人とも別々の問題・箇所について調査し三四日を経て帰学された。有終館二階の一室でわたくしを交えて三人で調査について語り合った。グラント先生はこの論文と調査・統計の出所について，学位授与には不適格であることを挙証し，厳然として学問的には何ものの権威にも屈しない態度と毅然たる決意をもって同志社大学では論文を返却すべき

であることを説き且つ主張された。実に熱意と迫力とを有った真剣な論議の態度であった。嶋田教授も別の部面から論文の学問的価値、調査統計の学問的水準について、同志社大学はこれまで自らの築き上げた大学社会科学の水準を崩すべきではないことを慎重な態度と言葉をもって述べられた。わたくしは二教授の学問的・実証的立場と態度とに強く心を打たれたのであった。それまで日常穏かに語り合い相対していたこの二教授が、こといやしくも学問の領域において語るときは、何らの権威にも屈することなく、かくまで毅然として一步も譲らず、また膝を屈して妥協するようであってはならないという学者的・科学的態度を示されたのであった。それまでにその調査・論文を閲覧していたわたくしも両教授の意見と主張の正しさを認めざるを得なかった。三人は検討し、協議し、合意のうえ、学位論文を受けつけずに本人に返却することに決したのであった。

問題はこれだけのことであったが、今日にあって顧みるに、占領下、外人研究者の調査論文にたいして、もし紹介者・推薦者の権威や見解に安易な顧慮して学位授与ということになったとしたならば、後日学界からの如何なる批判を受けても同志社大学は弁解の余地がなかったであろうことを思えば全身冷汗を覚えるのである。公けになる前に阻止された。グラント先生と嶋田教授との見識と態度と勇気の賜である。

わたくしはここに論文提出者の姓名も紹介者・推薦者の姓名をアルファベットでさえも挙示しなかった。読まれた方々には、この一文はまさに隔靴搔痒の感を深からしめたであろうと考えると心身のちぢまる思いがするが、ここにその「真相」を明確に明かにしていないことが、「秘話」たるゆえんである。この「秘話」はグラント先生を偲ぶごとに思い出すので、もしわたくしがこの一文を書かなかつたとすれば、恐らく永遠に忘却の淵に底深く沈められたままになってしまうであろうことを思い心ならずも不備不完全のまま「秘話」としてその結果だけをとどめておきたいと念願しつつ擱筆する。(1975.5.7)